

# 藤田南洋

# 日記展

新聞で名を知った石川啄木。何者か知らなかつたが、何となく新しい、そして自分らを理解してくれる人のやうな気がした。

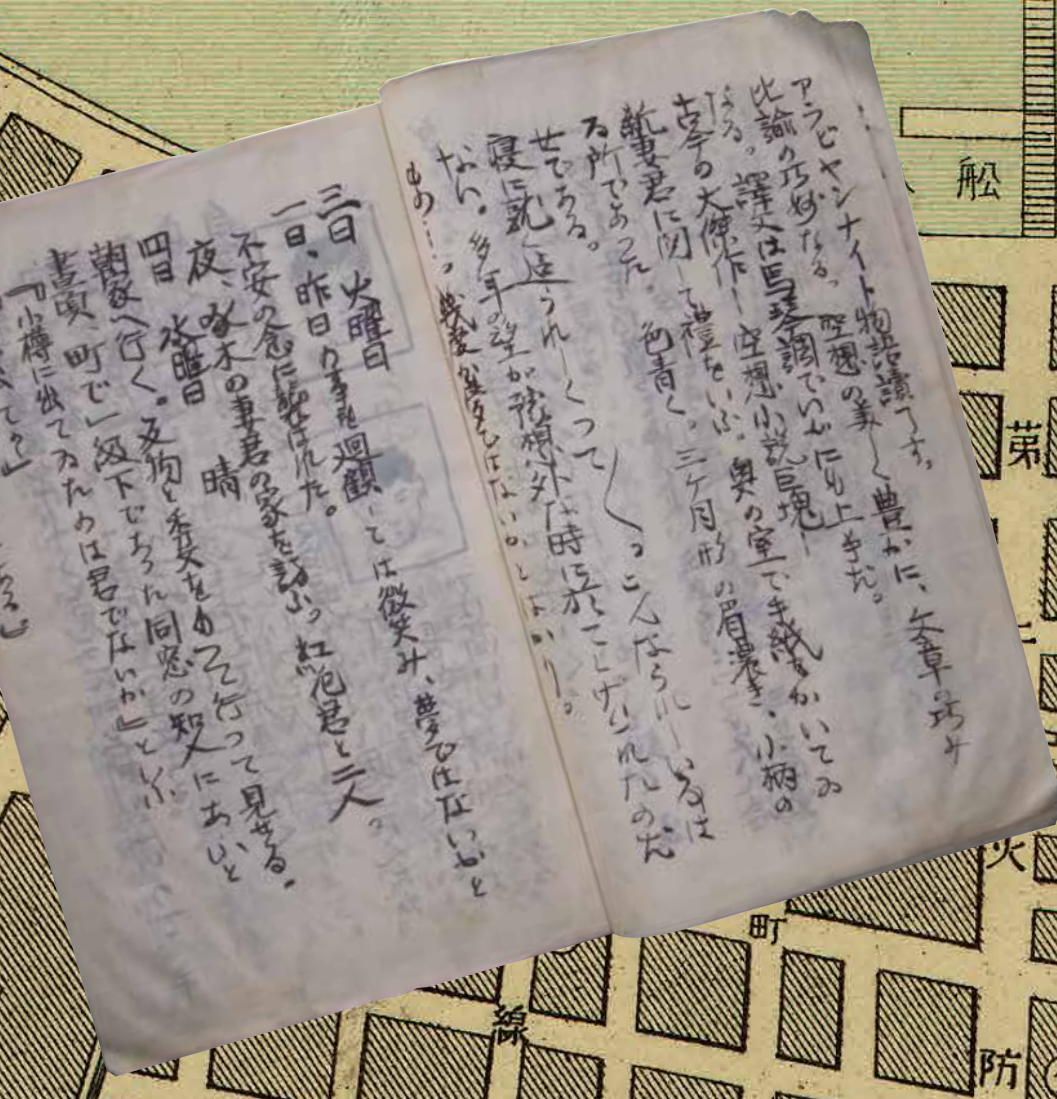
去年の晩秋、寒い雪の夜に自分は花園町十四番地、その人を訪ねた。こぢんまりした家の爐端に小さな机を据ゑてその人は何か書いてゐた。髯を生やした人を想像してたが、まるで書生みたいだつた。頭は禿頭病にかゝつたとかで毛が少なかつた。キセルで煙草を飲んでゐたが、笑うと虫歯がのぞいた。

その夜は文藝の話などしなかつたが、軽快な話しぶりが自分を引きつけずにをかなかつた。

藤田南洋「石川啄木氏の面影」(『海鳥』創刊号 大正元年八月十五日)よりアレンジ

明治四十年の末、親友高田紅果とともに石川啄木のもとを何度も訪ね、その人と文芸と哲学に引き付けられた。生涯ただ一人の師、啄木を偲びながら、新しい文学を乱読し、創作を試み、投稿を繰り返す、入選のしらせに躍り上がった。雑誌に載せるために初めて撮つた写真写りにガツカリし、安い給料に不平を連ね、ともに文学を志す友に対抗心を燃やした。

その少年、藤田南洋(武治) 明治四十一年の日記が初めて公開される。明治・小樽の文学少年がどんな夢を見、本を読み、生活に苦しみまた楽しみを見つけたか、その一端を偲んでほしい。



会場 市立小樽文学館フリースペース (観覧無料)  
開館時間 9時30分~17時 (入館は16時30分まで)  
休館日 月曜日 3月21日(木)  
主催 市立小樽文学館/後援 小樽文学会

令和6年3月16日(土)~4月14日(日)